

令和7年度第2回北海道立近代美術館協議会 議事録

1 日 時

令和8年(2026年)3月4日(水) 13:30~15:50

2 会 場

北海道立近代美術館 3階 会議室 (Web会議システム(Zoom)併用)

3 出席者

(1) 委 員

大石朋生(Web会議システムによる出席)、北村清彦、木村寿賀子、霜村紀子、千葉徹、中井令、野尻敦子、長谷川宏美、堀口基一、三橋純予(Web会議システムによる出席)、吉崎元章(計11名)(欠席:藤島尚子)(敬称略・50音順)

(2) 事務局

ア 近代美術館

立川館長、菅野副館長、村山学芸副館長、熊澤総務企画部長、佐藤学芸部長、青山総務企画課長

イ 三岸好太郎美術館

櫻井館長、本吉副館長

ウ 教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課

浅野道立近代美術館担当課長

4 傍聴者

なし

5 議 題

(1) 近代美術館

ア 令和7年度事業の実施報告について …… 資料1-1

イ 令和8年度事業運営計画(予定)等について …… 資料1-2

(2) 三岸好太郎美術館

ア 令和7年度事業の実施報告について …… 資料2-1

イ 令和8年度事業運営計画(予定)等について …… 資料2-2

(3) 近代美術館・三岸好太郎美術館

北海道立近代美術館リニューアルに向けた検討状況について …… 資料3

6 議 事

(1) 近代美術館

ア 令和7年度事業の実施報告について …… 資料1-1

イ 令和8年度事業運営計画（予定）等について …… 資料1-2

(ア) 事務局から資料1-1及び資料1-2について説明

(イ) 質疑・意見

【北村会長】

前回の協議会で、そのときに開催中の「1945-2025 美術は何を記憶しているか」という展覧会について、委員の皆さんが絶賛されていたと思いますが、それをリモートミュージアムで見られるということですね。素晴らしいと思います。

美術館としての生命線は、やはり、どのようなコレクションを収集・保存して、どう展示するのかということが第一になるので、来年度も力を入れていくと良いと思います。

キッズ・ツアーも、0歳、3歳、5歳のお子様に参加し、未就学児にフォーカスした形で実施したということですね。芸術の森美術館でも、0歳からの取組を実施していますが、これから、どんどん人口が減少して子供も少なくなっていく中、美術館を応援してくれる方、そして、10年先、20年先、30年先の観覧者を増やすためにも、そのような試みは大事だと思います。研究紀要はもう出たのでしょうか。

【佐藤学芸部長】

はい。出たばかりです。

【北村会長】

後ほど拝見したいと思います。

オンラインアートは、カメラワークに改善の余地があるのかもしれませんが、専門のカメラマンが関わるわけではないので、そこまでのクオリティを求めるのも酷かなとも思います。もちろんクオリティも大事ですけども、量的な部分で、なるべく多くの学校とできれば良いと思います。現在は、まだ6、7校くらいですかね。

【佐藤学芸部長】

令和7年度（2025年度）に関しては、9校10件です。実施校や件数は、本庁で取り仕切って調整しているので、来年度については、まだ決まっていません。

【北村会長】

実施校ですが、例年、同じ学校なののでしょうか。それとも、別の学校を選んでいくのでしょうか。

【佐藤学芸部長】

例えば、希望数が多ければ、既に実施した学校は、優先的には扱わないというようなことはあります。

【北村会長】

毎年実施している学校もありますか。

【佐藤学芸部長】

それほどないと思います。

【北村会長】

それから、やはり気になったのは、アンケートです。いろいろと御意見を伺って、どのような対応をするのかというのは、とても重要ですし、間違った対応をしてしまうと、炎上してしまうこともあるだろうと思います。アンケートの回答は、とても貴重な御意見ですが、すぐに対応できることとできないこと、例えば、建物の構造的な問題で、ソファを置きたくても置けなかったり、また、特別展を1時間、2時間かけて観ると辛いので、途中で水を飲んだり、トイレに行ったり、休憩したりしたくても、いろいろな事情でできないということは、あると思います。

ただ、もちろん、建物の構造的な問題などで、すぐには解決できないこともあるのだろうとは思いますが、そのような中であっても、「このような問題が、この美術館にはあるのだ。」ということをしちんと認識しておいていただきたいと思います。例えば、展覧会の出口に、再入場できませんと書いてありますが、トイレであれば、その日の再入場ができるとか、一度ロビーに出たり、カフェに入ったりして休憩してからでも再入場できるといったことなど、やり方はあると思うので、できない中でのやり方というのを考えていただければと思います。

【吉崎副会長】

二つほど、御意見をさせていただきたいと思います。

一つ目は、「イワタルリ展」で、すごく良いと思ったんですね。会場をゆったりと使って、展示点数自体は少ないにもかかわらず、間延びした感じがなく、とても緊張感のある空間になっていて、思い切った展示をしたことに本当に感心しました。

また、展覧会の図録も作られていて、しっかりと会場の写真が本として残るといえるのは良いなと思いました。ただ、残念だったこととして、ちょっと価格が高いですね。48ページで3,300円ということで、図録に対して一般の方が持っている認識からすると、ちょっと高めかなということでは思いました。いろいろな事情があって、そのようになっていると思いますし、同じような課題を抱えている美術館も多いのですが、図録自体も展覧会の重要な一部として、展覧会に感銘を受けて、図録をしっかりとっておきたいという方が、手に入れやすい方法があれば良いのだけれどもと思ったところです。

もう一つは、来年度の展覧会のラインナップです。今、御説明をいただいて、コレクション展は、いろいろと工夫を凝らして、コレクションを生かし、いろいろな切り口で見せるというのが伝わってきますし、個人的には、冬の札幌国際芸術祭が、「PLANET SNOW」というテーマで開催される中、札幌、また、北海道の作家が、雪とどのように向き合い、どう表現したのかというのを展示できるということは、すごく響き合っていて良いなと思いました。

ただ、率直な感想を言わせていただくと、来年度の特別展については、これまでの道立近代美術館の展覧会に抱いていた、ここでしかできないような圧倒的な存在感というか、あるいは、学芸員が深く関わった意義深い内容への期待が持てるというようなところが、あまり感じられなかったです。新鮮味がないというか。「ポケモン×工芸展」は、3年前に国立工芸館で開催して全国を巡回しているものですし、「魔法の美術館」も、子供向けの定番買取企画としてあちこちを回っているもの、

「田中達也 見立ての世界」についても、既に釧路で開催していて、朝ドラのオープニングで話題になったのも、もう10年くらい前の話で、デパートでも開催しているものですので、正直なところ、「これを近美で開催するんだ。」ということとは思いました。派手な、注目される展覧会を開催すれば良いということではないのですが、いつもの近美らしいパワーというのが、あまり感じられないというのが正直な感想です。道単独展の函館美術館のコレクションについては、いろいろな料理の仕方があると思いますので、セレクションですけれども、意義深い、面白いものとして組み立ててくるのではないかと期待しています。

【北村会長】

実行委員会や道単体で実施する展覧会というのも、なかなか難しくなってきたのかなという気がしますね。堀口委員は、今回初めての御出席ですが、いかがでしょうか。

【堀口委員】

今回初めて出席して説明を聞かせていただき、たくさんの事業、いろいろな視点や取組があるのだなと思いました。

私は教員ですので、美術教育に関心が高いのですが、北海道造形教育連盟でも、3年前から新しい研究部会を立てていて、そのうちの一つにミュージアム連携部会というのがあります。3年間で三つの実践を取り組んでいて、少しずつ美術館に近づいているというような状況です。初年度は、学校周辺の美術作品等に着目し、2年次は、学芸員の方と教員が連携して、教材を一緒に作っていただいたり、インタビューをして動画を取らせていただいたりしました。そして、今年度は、実際に子供が美術館に出向いて、直接、作品を鑑賞しました。オンラインなどの多様な教材もあると伺いましたし、また、子供たちを美術館に連れてくるというのは、今の教育課程の中では、授業時数やバスの問題、安全上の問題などもあるので難しい面もあるのですが、やはり地元ですし、せつかくの素敵な施設ですので、札幌の美術教育でも宣伝をしながら、徒歩圏の学校が多くなるかとは思いますが、活用させていただけたらと思っています。

また、子供たちの授業はもちろんですが、先生方の研修、今は働き方改革も言われておりますので、先生方の感性を高める上でも、先生方が美術館に来て一息つくということも大事にしたいと思っています。

【北村会長】

多様な主体との連携・協力に関わることで言えば、例えば、指導者向けの研修や自主研修、また、部活動の地域展開の問題などもあります。学校の美術部がこれからのどのような形になっていくのか、よく分からないですけども、運動、音楽、演劇などでも、地域の指導者に協力をお願いするようなことになりつつありますので、例えば、鑑賞教育で美術館が学校と連携するような形というのは、これから増えてくるのかもしれないと思います。

【中井委員】

私も、「イワタルリ展」は、とても感動しました。展示している作品が少ないという意見もあったらしいですが、私は、一つ一つの作品をととても大切に展示してい

ると思いましたが、作品が宝物のように生きている展示だと思いました。作品を360度から観られる展示になっていたのも良かったです。

岩田家の方々の作品は、色ガラスが特徴的で、それぞれの色にとっても個性があって、そうした部分をイワタルリさんが自分の中で消化し、自分の色として、燃えたぎるような作品を目指し、こんなにもたくさん生み出していたというのが素晴らしいかったです。照明の当て方にしても、作品がすごく映える展示になっていたと思いました。

ただ、いつも一つ一つの作品をじっくり観るものですから、私も、途中で休憩したいなと思いました。その日は、開会の日だったので、イワタルリさんにもお会いできて、今も精力的に作品を作られているとおっしゃっていたことに感銘を受け、感動してじっくり観たのですが、そこですごく疲れてしまいました。

隣の展示室で「おはなし美術」も開催されていて、せっかくだので両方の展覧会を観ようとしたときに、カフェでのメニューが充実していれば、ご飯を食べたりして一旦切り換えられるのですが、今は、主にドリンクしかないですね。ちょっとしたスイーツがあっても、すぐになくなってしまいうようで、「もうないです。」という感じになっていました。前に伺ったときにも飲み物しかなかったのも、その辺りが充実すれば良いなと思います。

「おはなし美術」も、すごく良かったです。私自身、今は、デジタルで作品を作っていて、直接筆を持つことがないものですから、生の筆で描いた絵や原画にすごく感動して、一つ一つ拝見させていただきました。

あと、インバウンドの方がとても多かったですね。欧米の方よりは、アジア系の方が多くいらっしゃっていたこともあって、多言語対応というのは、今後、必要なのかなと感じました。それと、とても良いと思ったのが、彫刻作品に触って良いですよというところで、解説パネルが点字になってましたよね。そのパネルも、手に持って触ることができるようになっていて、来館者に寄り添った解説パネルになっていたということも工夫が感じられて良かったと思います。そして、青木美歌さんのガラスの作品が長く展示されていると思うのですが、とても素敵で、曲線を使った造作の一つ一つに命が宿っているというのが伝わってきて、また、それがとても薄いガラスであるということで、生命のはかなさというものが伝わってきて、たくさんの方に観ていただきたいなと感じました。

【北村会長】

インバウンドは、どれぐらいの人数なのかはわかりますか。

【熊澤総務企画部長】

はい。外国人の方々の利用状況は、毎月カウントしています。今年度は、1月末現在で約10,000人で、そのうちの7割が近美コレクションの観覧者となっていて、近美コレクション観覧者数の約2割が外国人となっています。

【佐藤学芸部長】

大雪で、美術館までの道が、けもの道のような状態になっているときでも、インバウンドの方々が結構いらっしゃいます。

【北村会長】

分らないですが、「あそこに行ったら。こういうものがある。」という情報がどこから出ているのでしょうかね。今後、多言語対応が更に必要になってくるかもしれないです。

【霜村委員】

「イワタルリ展」は、とても感動しましたし、イワタルリさんの作品が展示されることによって、近美コレクションのガラス作品の良さも、すごく際立っていました。世界各国のガラス、また、日本国内の知られざる作家の作品を集めて、並べて展示していると、素材や技法の違いがもっと引き立ってくるように思います。やはり、特別展とコレクション展を合わせて観たいというのは、いつも感じているところですよ。

それ以外にも、三つほど感想です。

まず、リモートミュージアムです。「1945-2025 美術は何を記憶しているか」のほかにも、文学館で開催していた「長谷川四郎とそのきょうだい」や会場でも流れていた鈴木ヒラクの制作風景の映像記録などが、展示が終わっても見られるということですね。展示室で読み取れない学芸員の思いや作家の言葉といったものにも触れることができるので、リモートミュージアムでいつでも見られるというのは、とても良いと思いました。会期中に間に合えば、会期中に合わせて見たいですし、展示が終わってから、展覧会に来られなかった方も見られるので、これは、もう少し宣伝しても良いのではないかと思います。多くの方に知っていただきたい内容だと思います。

二つ目は、キッズ・ツアーですが、11月3日に「おしゃべりデー」を拝見することができました。小学校低学年の子供に、どのような形で作品鑑賞を促すのだろうか、とても興味深く見せていただいたのですが、畳の小上がり式のところがあり、コレクションの入口が、部屋に靴を脱いで座るような空間になっていて、参加した子供が、座って恥じらいながら付き添いの方にくっついたり、リラックスして転がったりしながら、一つ一つ作品を鑑賞していました。抽象的な作品だったので、どのような切り口で、どのような言葉を引き出していくのだろうかと思っていたのですが、ファシリテーターをする学芸員の方の促し方や鑑賞の導き方にとても力があって、作家や作品のことをよく知った上で、子供たちに、色や造形、材質など、いろいろな切り口から語りかけ、子供の率直な感想や感覚を促していたのが、とても興味深かったです。子供は、美術館で大声を出したり、作品に触れようとして叱られると、もう二度とその空間に行きたくなくなってしまうものですが、誰一人、その場を離脱することなく、最後まで楽しんで、一人一人、全員発言していました。このような企画というのは、どんどん回数を増やしていただければと思います。

また、子供だけではなく大人にとっても、美術館で作品の感想やその場で受けた感動を声に出して良いというのはとても大事なことかなと思います。もちろん、うるさくしゃべるのは良くないのですが、このような場で、美術鑑賞をいろいろな形で楽しむという企画は、今後も続けていただきたいと思えますし、とても参考になりました。

三つ目は、来館者アンケートについてです。北村会長もおっしゃっていましたが、

対応が会場に張り出されていて、その面積がかなり増えたということに、とても感動しました。小さな箱を置いて、「アンケートを受け付けていますので、お寄せください。」というのは、他の館でもよくありますが、アンケートを踏まえた対応を貼り出して、迅速に対応していることを来館者に伝える、見せるということが素晴らしいと思いました。

美術館や博物館は、学芸員だけでできているものではないです。特に、来館者サービスというのはとても大きくて、その基盤があって初めて、展示や調査研究が生きてくると思います。快適な空間というのは、職員全員の協力で作られるものであり、「お客様のアンケートを踏まえて対応します。」という姿勢を示し、対応した結果を見せて、「皆さんの声が届いています。」と伝えるということは、素晴らしいですし、意義があることだと思います。これは、もっと強調して良いことだと思います。

【北村会長】

木村委員は、いかがですか。

【木村委員】

私も、二つ、三つ気付いたことがあります。

まず、2階のカフェのコーヒーですが、今は紙コップで提供されています。ただ、展示会を観た後、ホッとしたいなと思ってカフェに行ったときに、紙コップでの提供というのは、ちょっと味気ないかなという感じがしますので、その辺りは、考えていただきたいかなという気がします。

また、中井委員も触れていましたが、メニューが本当に少なく、入っているお客さんも1名か2名くらいで、何となく物悲しい感じがするというのが現状ではないかと思います。

それから、私の友人が感動して話してくれるのは、大きな企画として何年かかけて招致している特別展を、わざわざ遠くに出かけて行かなくても観られるということにとても満足しているということです。そして、講堂で、展示品に関していろいろな話を聞いたり、開催に当たった学芸員の方々の苦労話を聞くのが、とても楽しいというようなことも言っていました。

また、常設展示のテーマですが、なかなかユニークな感じがしています。このようなテーマに関して、展示がどのようにつながっているのだろうと想像したり、ボランティアの方たちが、その意に沿った解説をしてくださるのが、とても素晴らしいと思ったりしています。ただ、如何せん、観覧者が、一人、二人しかいないときがあり、全体的な人数が少ないですね。もう少し観覧者が集まるように工夫されると良いかなとは思っています。

【北村会長】

おもてなし感のあるものが、もっとあると良いと思いますね。ただ展示されているだけではなくて、展示を介していろいろな人が集まって、楽しくコミュニケーションできる、話し合うことができるということになればと思います。

【千葉委員】

先ほど、外国人観光客の方の話があり、近代美術館の良さが外国の方にも広まっ

ているということに非常に感心したところです。今年の特別展もたくさんの方が入っていて、特別展では1日に1,000人くらいということですが、その一方、常設展は、1日に200人弱くらいということなので、もう少し、特別展を観た方を常設展に誘導するような形にできればと思いました。

常設展ですが、非常に充実していると思うんですね。先ほどもお話のあった「おはなし美術」も、例えば、栗谷川健一さんの作品は、ポスターなどではよく見ているのですが、実物の絵を観ると「やはり本物だな。」と思いますし、それを身近なところで観られるというのは、素晴らしいと感じました。今回の「おはなし美術」は、1階と2階で全く違った展示になっていて、本当に楽しめる展示になっています。しかも、観覧料が510円ということで、これは、もっと知ってもらいたいなと感じたところです。

【北村会長】

特別展と常設展の動線をどのように結びつけるのか、どのように来館者を誘導していくのかというのは、非常に難しい問題です。近代美術館の場合、展示室が右と左に大きく分かれてしまっているのが、なかなか両方の展示に足を運ぶことができず、回遊性が生まれにくいです。リニューアルの検討でも、そうしたことが話題になっているのですが、構造的に難しいという話が出ています。野尻委員は、いかがですか。

【野尻委員】

「イワタルリ展」の最終日に来たのですが、私は全くの素人なので、詳しい友人と一緒に来て、友人がいろいろと説明してくれました。難しい言葉で説明されても分からないのですが、綺麗なものは綺麗、ただそれだけを感じる事が大事なのかなと思いました。

また、こういう場所に来て、その雰囲気に触れ、その雰囲気を感じたまま、帰りに喫茶店に行って、いつもとは違う感覚に浸ることができるというのも良かったなと思っています。そう言いながらも、家に帰ったら、また主婦をしなければならないのですが。私は素人なので、そのような言葉でしか言えないのですが、映画館に行くのと似たように、美術館に来て、普段とは少し違う日常を味わうというのは、すごく良いことだと思います。

また、前回も同じことを言ったのですが、やはり、綺麗なものを観るのは、絶対に良いことだと思うんですね。「美術ってすごい。」とすることがあれば、その子の人生を変えることがあるかもしれないと思います。私は、札幌国際情報高校のPTAに在籍しているのですが、美術部に熱心な子がたくさんいるので、学校に行くたびに「ぜひ、たくさん足を運んでね。」と言っています。小さいとき、若いときの感覚というのは、年を取っても覚えていると思います。綺麗なものは綺麗ですし、感動した気持ちというのは、ずっと心に残ると思いますので、まずは、「美術館に来よう。」という気持ちになってほしいですし、画面ではなく実物を観て、感じてみてほしいと思っています。

【北村会長】

美術館とは、どのような存在なのかと考えると、なぜ美術館があるのか、何のた

めの美術館なのか、という難しい問題になってきます。そのような難しい問題はさておき、美術館に来て、楽しんで、雰囲気味わって、そのことが心に留まっていると、いつか発酵して、自分自身の豊かさにつながっていくことなのかなと思います。すぐに成果があるものではないのかもしれませんが、長い目でみた子供たちに対する配慮、また、大人に対する配慮というのが必要なのかなと思いますね。

長谷川委員は、いかがですか。

【長谷川委員】

「イワタルリ展」を観た後、常設展に行き、予備知識も全然なく2階に上がっていくと、イワタルリさんのお父様、お祖父様の作品が置いてあり、ハッとさせられました。「イワタルリ展」を観たからこそ、この方々の作品に目が行くのだなと気付く、この展示の流れにワクワク、ドキドキして、素敵だなと思いました。特別展と常設展、どちらも素敵だったのですが、やはり常設展での色の鮮やかさに目を奪われたところが多かったです。いつも観させていただいているのですが、あのときは、特別展との関連性でより一層、楽しませていただきました。

それから、知人がすごく喜んでくれたことがあります。何人かでロビーで待合せをして常設展を観ましようとなったときに、ロビーから見て常設展の入口に白い紙が置いてあることに気付きました。みんなで近づいていくと、点字のテキストでした。知人は、二人とも目が見えなくて、一人は点字が全く読めないのですが、もう一人は、それを手に取って、私たちに小さい声で読んでくれて、「こういうことが書いてあるんですよ。」と教えてくれました。私が、「点字のテキストがあったことに、今初めて気が付いた。」と言ったら、「こういうのを置いてくれるだけで、とても嬉しい。」「こういうところから、少しずつ変わっていったら、もっと来やすくなるんだけどなあ。」と話していたのが、とても印象的でした。点字は、全ての人を読めるわけではないですが、そこに置いてあることの嬉しさというのは、誰にでもあると思うと話していました。こういう一つずつの積み重ねが大切なんだなと感じました。

もう一つ、イワタルリ展のオープニングで、気になることがありました。イワタルリさんは、現役の作家で、とても熱量のある方で、そのパワーをものすごく感じられる方でした。御挨拶の際に、車椅子でいらっしゃいました。会場の中央には演台があり、車椅子のままでは演台にお姿が隠れてしまいます。ですから、立ち上がって御挨拶をしていました。作家さんの要望でこのように進めたのかもしれませんが、会場のお客様は皆さん座っているので、演台をなくして、座ったままお話ができるようにするなどの配慮があっても良かったかと思います。「全ての人に開かれた」というのは、来場者だけでなく、作家さんや美術館で働く方も含まれていて、そのように少しずつでも変わっていくことができれば、美術館全体の雰囲気も変わっていくのかなと思っています。

来年度のスケジュールを見て、普段は観ることができない特別展にワクワクしてはいるのですが、申し訳ないですけれども、やはり常設展の方が魅力的だなと思っていて、これからも応援させていただきたいと思っています。

【北村会長】

来年度も、社会包摂をテーマにした展示があるそうですし、障がいのある方への配慮というのは、これから更に求められるのかなと思います。大石委員は、いかがですか。

【大石委員】

皆さんのおっしゃっていることのほとんどが、僕の感想にも当てはまると思いつながら聞いていました。特にガラスの展覧会ですね。青木美歌さんの作品、そして、「イワタルリ展」は、素晴らしかったと思います。特別展は、僕も全て観させていただいて、展示の内容もさることながら、とても観覧者が多いという印象があったのに対して、常設展の方は、中身はものすごく良い展覧会なのですが、「ちょっと寂しいなあ。」とは思いました。2階に上がってガラスがあると、とても観やすく、良い環境が整っていると思いつながらも、観覧者が特別展ほどではないというのは、所感として受けました。

僕個人の話をして、あまり意味がないかもしれないので、僕の大学の受験生や学生さんの話をすると、ポートフォリオを持ってきてくれたりする中で、最近観た展覧会で印象に残ったものとして人気が高かったのは「トーベとムーミン展」でした。大人気でしたね。特に、大学生になる高校生、中学生に刺さりやすい展覧会を実施していただくと、これからの美術愛好家を増やすという意味では有効なのかなと思いました。

もう一つは、1月から3月にかけての常設展の内容が本当に素晴らしくて、来年の「雪々と」もすごく楽しみです。今年は、「カラー・オブ・グラス」であったり、「おはなし美術」であったり、素晴らしかったと思うので、1月から3月にかけての展示を更に充実させていくこと、そして、特別展からどのようにして常設展の方に人を流していくかということについて、いろいろと検討していただければと思います。

やはり、教育大を受験する学生さんには、「ウィズ・キッズ」などを話の中に入れていただきたいと思うのですが、なかなか、教育を志す学生であっても、観てもらっていないという実情も事実としてあります。ここを何とかしていきたいというのは、僕も感じていますし、美術館の使命として重要なところだと思いつますので、いろいろと考えていけたらと思いつています。

【北村会長】

ありがとうございます。三橋委員は、いかがですか。

【三橋委員】

皆さんの言われていることは、私も同じように感じているところがあるので、少し違うところをと思いつます。常設展の観覧者が少なく寂しいという感想が多かったのですが、私の場合は、学生たちと一緒にいくということもあって、いつも40人くらいいるような感じで、レポートもあるので適度に話しながら、かなりいい雰囲気です。常設展を観させていただいています。それくらいの人数がいると、安心しながら、賑やかな感じで観ることができるのかなと思いつました。

それと、常設展の2階は、飽きないようにかなり工夫されているということもあって、観ることができた学生たちには常設展がとても好評で、観やすいという声か

出ていました。ただ、特別展を観た後に常設展となると疲れてしまって、体力的に難しいところがあります。特別展を観た後は、常設展に行くか、三岸に行くかという感じになり、三つを回るというのは厳しくて、半日だと二つくらいが限度かなと思います。学生には、たくさん観させたくて、観る時間やインターバルなどを考えて日程を組むのですが、間に少し休憩できる場所があると、少し休んで「次、行こうか。」となるのかなと思いました。

また、10年、15年くらい前に、博物館教育論などで、教育普及が充実している美術館ということで検索してもらったり、レポートを書いてもらったりしたときに、近代美術館というのは、敷居が高い、ワークショップなどにはあまり取り組んでいないといったイメージがあるという声が、特に、入ったばかりの1年生から多かったのですが、実際に調べてみると、どれだけ取り組んでいるのかが分かり、親近感が湧いて、イメージがかなり変わるということがありました。とはいえ、申込制であったり、オンラインであったりすると、美術館に行っただけでは、何に取り組んでいるのかがよく分からないところもあるので、親しみを持ってもらえるように、取り組んでいることを紹介するコーナーを置くなどして、一般の方にも分かるような形にすると良いと思います。「子供向けに、こんなに取り組んでいるんだ。」というようなことが、一般の人たちにも分かる形になるだけでも、応援していきたいという気持ちにつながっていくだろうと思いますので、広報の仕方が大事なのかなと思っています。

あと、オンラインアート教室ですが、高校や特別支援学校など、いろいろなところと実施していると思います。私も、小学校での出前授業やワークショップをしているのですが、例えば、養護学校で実施するときに気を付けていること、成功したこと、改善したことなどがあれば、教えていただけると参考になります。私の場合は、直接出向いているのですが、オンラインでの実施となると結構難しいところもあると思いますので、教えていただければと思います。

【佐藤学芸部長】

委員の皆様から、オンラインアートに関してコメントをいただいていたので、三橋委員のおっしゃったことだけではなく、オンラインアート全体について補足させていただきたいと思います。

現在のところ、申込みのあった学校には、大体対応できています。この事業に関しては、教育庁本庁の文化財・博物館課で集約した上で、当館だけではなく、道立美術館全体で調整しており、例えば、第1希望、第2希望などがあって、他館と調整して対応することもあります。

普段、学校の先生に「来てください。」と言っても、「バスが。」「足が。」「授業が。」とおっしゃることが多く、その一方で、オンラインアートに関しては「使いやすい。」「今後も。」という声をいただくので、来館のハードルが高いと改めて感じているところです。

ただ、オンラインアートに関しては、撮影や説明のため、一つの学校の対応に3人くらいの学芸員が関わる必要があり、関わる人数や実施校をどのように調整していくのか、また、例えば、子供が100人のときに、どのような授業であれば可能な

のかといったことが、今後の検討課題かと思っています。

養護学校など、特別支援学校との実施は増えており、事前に、担当者が学校の先生と「どのようにしますか。」などと相談しながら、いろいろと調整をしています。

学年や人数によって一つ一つ異なりますので、「養護学校だから。」といったことではなく、個々の学校に応じて検討しています。テーマについても、美術館から絵や彫刻などの案を提示し、学校が「浮世絵をやりたいです。」「彫刻をやりたいです。」と選ぶようになっていきます。

【三橋委員】

追加の質問です。ケースバイケースだとは思いますが、例えば、養護学校であれば、1回にどのくらいの人数になるのでしょうか。

【佐藤学芸部長】

今年度であれば、白樺高等養護学校では12名、札幌伏見支援学校もなみ学園分校では32名、余市養護学校では5名、余市養護学校しりべし学園分校では9名となっており、人数は、バラバラです。

【北村会長】

近代美術館は、教育普及に力を入れるというのが元々のコンセプトであったと思うのですが、三橋委員の話によれば、そのような近代美術館のコンセプトと外部の認識との間に多少のずれが生じているのかなと思います。ただ、実際には、いろいろな事業を実施しているわけですから、近代美術館の事業をどのように可視化して、広く認識してもらうかということについて、検討が必要なのかなと思います。

【佐藤学芸部長】

先ほど、キッズ・ツアーに触れてくださった方がいらっしゃいましたが、最初は0人ということもありました。担当者が手作りチラシを作って、近郊に持って行ったところ、現実的な効果は分からないですが、参加者0人ではなくなったということもありましたので、可視化は、とても大切だと思います。新聞を取っている方が少なくなっていると言いつつも、新聞に載ると申込みが増えたということもあり、今も、新聞を見ている方は多いなと思いました。

【北村会長】

世代によって使うメディアも違うのでしようから、必要な情報を必要な人にどのような形で届けるのかというのは、なかなか難しいことだろうと思いますが、これだけ一生懸命されていることですので、少しでも広く周知していきたいと思えますね。

(2) 三岸好太郎美術館

ア 令和7年度事業の実施報告について …… 資料2-1

イ 令和8年度事業運営計画（予定）等について …… 資料2-2

(ア) 事務局から資料2-1及び資料2-2について説明

(イ) 質疑・意見

【北村会長】

年間を通じて調査研究を行ったことが展覧会に反映され、それが教育普及にもつながるといふ、とても良い循環で活動できたのではないかと考えています。その割に、展覧会に人があまり入らなかったのが残念なのですが、とても充実した展覧会だったと思います。私も、北大に外山卯三郎の本がたくさんあるので、大体は目を通してのですが、「ひっかき」の観点からというようなことはなかったの、そのような新しい気付きなど、充実した調査研究や展示が行われていて、それを普及するワークショップを行っているという印象を持ちました。

来年度の展覧会について、最初に計画を聞いたときには、「なぜ、移動美術館なのか。」と思ったのですが、今、事情を聞かせていただくと、工事で休館になるかもしれないから移動美術館を予定したということですね。工事は、いつ頃入るのですか。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

まだ決まっています。

【北村会長】

令和9年度（2027年度）も、まだ分からないということですね。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

そうですね。

【北村会長】

美術館の外で実施するということ、どのような効果をもたらすか、どのような結果をもたらすかというのは、来年の今頃、いろいろ伺いたいと思います。

【千葉委員】

先ほど、近代美術館で、外国のお客さんは10,000人くらいというお話でしたが、三岸好太郎美術館は、どうでしょうか。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

1月末現在で、総来館者が約9,000人で、そのうち外国の方が約1,500人となっています。毎日、インバウンドの方が来ています。

【北村会長】

どこから、SNSなどで、そのような情報が出ているのでしょうか。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

グーグルマップを見て、いらっしゃる方もいるようです。

【北村会長】

口コミのようなものが投稿されているんでしょうかね。大石委員は、どうですか。

【大石委員】

教育大HUGを使っていたり、教育大岩見沢校との連携もあつたりという

ことで、若手の育成に特化した美術館というのが、いよいよ根付いてきたように思います。希望を持てる素晴らしい企画だと思っていますし、これを更に増やしていくために、若手を応援するための展示企画であったり、あるいは、三岸とセットにした展覧会企画のようなものを令和9年度（2027年度）、令和10年度（2028年度）に組んでいただけると良いなと思いました。

若手の学生さんたちにとって、美術館で展示ができるというのは、本当に夢のようなことだろうと思います。敷居をどこまで下げられるか分からないですが、集客数につながるのではないかとということもありますので、もし企画が組めるようでしたら、検討していただけるとありがたいと思っています。

【北村会長】

御検討ください。

【吉崎副会長】

私も、個人の美術館である本郷新記念札幌彫刻美術館にいますが、三岸好太郎美術館が、開館以来、毎年毎年、いろいろなアプローチや切り口を思い付きながら取り組んでいることに本当に感心しています。特に、今回の外山卯三郎については、「なるほど。」と納得させられるような、文献から引っ張ってくるようなところもあり、若くして亡くなったはずなのに、まだまだ研究の余地がたくさんあって、それをきちんと見付け、いろいろと展開していく学芸員の発想がすごいと思いました。

また、本郷新、あるいは、三岸好太郎の美術館で、「さあ来てください。」と待っても、なかなか広がっていかないところがあるので、今回のように、外に出て行き、展示の機会を増やしていくというアプローチは、とても良いと思っています。我々も、最近、漫画の本を出したのですが、美術館でただ待っているのではなく、特に子供たちに親しみをもっと持ってもらいたいということで取り組んだものです。これからも、外への発信や外での展示を続けていただければと思っています。

【中井委員】

本当に、三岸好太郎をいろいろな切り口で紹介していて、何回も足を運んでいるはずなのに、知らないことや新しい発見が何回もあって飽きさせないことに本当に感心して拝見させていただきました。

あと、本当に若い方々、マール記念日のコンサートに関わってくださっている方もそうなのですが、皆さんのモチベーションが本当にすごいです。「ここまでやってくださるのか。」という感じで、マール記念日のときには、新しく作曲までしてくれるような入れ込みようでした。そういう私も、美術館で展覧会ということになると、すごく頑張ってしまうのですが。ただ、「みまのめ」の作家の方たちのやりがいに頼りすぎてしまって、作品の予算などとのバランスに問題がないかといったところに少し心配があるのかなということも思いました。

あと、先ほど言い忘れたのですが、ポケット学芸員を聴かせていただいて、とても充実していると思いました。今回、男性も加わって、いろいろな声で聴かせていただけるので、メリハリがあって一つ一つの解説をきちんと聴けますし、たくさんの方が協力してくれているという温かみも感じました。最近は、普通のニュースで

も、AIの音声で味気ないものが流れていますが、そのような中であっても、きちんと人が関わってくれているということに嬉しく思いました。

【北村会長】

今日は欠席されていますが、藤島委員の高校の生徒にナレーションお願いし、御協力いただいております、とてもありがたいと思っています。

今、お話のあった予算に関しては、非常に厳しいとは思いますが、いかがですか。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

「みまのめ」の若手作家さんには、予算をお示しして打診し、御了承いただいているところではあります。ただ、正直なところ、中井委員には、マールのことで大変御配慮をいただいております、大変恐縮しているところです。

【北村会長】

予算的に非常に厳しい中ですが、来年度、助成金が取れるんですかね。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

申請に当たって、吉崎副会長に御協力いただいたところです。ありがとうございます。

【吉崎副会長】

推薦文を書いたんです。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

3本申請しているうちの2本は、どうやら決まりそうだという連絡が来たので、ちょっと安心しています。

【吉崎副会長】

予算のことと言うと、実は、来年度、國松明日香の展覧会を開催するのですが、開催に向けて、クラウドファンディングをやってみようと思っています。うまくいくかどうか、一つの例になれば良いなと思っています。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

また御教授いただければと思います。

(3) 近代美術館・三岸好太郎美術館

北海道立近代美術館リニューアルに向けた検討状況について

(ア) 事務局から資料3について説明

(イ) 質疑・意見

【北村会長】

前回の協議会では、「これからの北海道立近代美術館検討会議」での議論が割とサクサク進んでいるので、次の協議会までの間に、思ったよりも話が進んでいるかもしれないといったことを申し上げたと思うのですが、実際にはその逆で、話が進んでいません。大きな理由として、隣にある知事公館との一体的な計画にしていこうという方向性があるって、美術館単独で話を進めるわけにはいかないという事情があるようです。

ただ、美術館としては、数年先のことまで考えて展覧会を計画する必要があって、リニューアルのスケジュールが決まらないと困ることになりますので、そのことは、この検討委員会でも申し上げているところです。

先ほど、アンケートへの対応がとても大事だという話もありましたが、「新しい近代美術館がどうなったら良いか。」というアンケートも、同じような形で繰り返し行われています。もちろん、その中には、取り入れるべき素晴らしい御意見もありますが、中には、正反対に分かれる御意見もあるので、全てを取り入れることはできないということもあって、どこまで御意見を取り込んでいくのかというのは、アンケートをすればするほど難しくなるというのが、私の感想です。

私は、この協議会を代表して検討会議に出席してはおりませんが、皆さんから御意見があれば、検討会議の中で伝えることも可能ですので、近代美術館のこれからの在り方などについて、御意見があれば承りたいと思います。

先ほど、作品をじっくり観ると疲れてしまうので、休憩スペースがあったら良いという御意見がありましたが、それが実現するかどうかは分かりません。例えば、左右にある展示室をくっつけて、常設展と特別展を休憩を挟みながら回遊できるような構造になれば良いと思うのですが、建物の図面を見ると、取り払える壁と取り払えない壁があり、物理的に難しいとのことでした。最初のイメージでは、スケルトンのような形で、建物全体を直すのかなと思っていたのですが、実際には、制限がかなり多いようです。

そのような中ではありますが、私たちの美術館が、ワクワクする良いものになることを願っていますので、皆さんから御意見があれば承りますし、今日は、文化財・博物館課の浅野担当課長もいらっしゃっていますので、私が答えられないことも答えてくれると思います。

あと、美術館としては、令和9年度（2027年度）に開館50周年を迎えるので、そこで何かできればということもあるのですが、リニューアルの検討が後ろ倒しになると、準備のための余裕がなくなってしまうので、もうギリギリのところにあるという説明がありました。検討会議の委員の中にも、これでは無理だという人もいらっしゃるくらいで、リニューアルの検討が後ろ倒しになり、バッファーというか、余裕がないギリギリの状況かなというところなんです。

【木村委員】

美術館協力会としては、近代美術館の事業に合わせて動くということが多いのですが、4月以降も、通常どおり事業計画を立ててよろしいのでしょうか。

【菅野副館長】

令和8年度（2026年度）は、1年間フルで展覧会等を実施しますので、これまでどおりです。

なお、令和9年度（2027年度）についても、フルで活動できるように検討しているところです。

【中井委員】

先ほど無理だと仰っていましたが、どのような展覧会を開催しているのか、中の様子が少し見えたりすると、「こちらでも展覧会を開催しているんだ。」という興味が湧くのかなと思います。建物の中をもっと広く、魅力的に見せるということができないのかなと感じました。

【北村会長】

建築家が、とても革新的な提案をして、うまく内部空間を活用してくれるような設計が出てくると面白いですね。ただ、そのためには、基本計画で「こういうことを実現したい。」というのを示していなければならないので、アンケートを実施するなどして、いろいろな要望を踏まえながら、何が実現できるのか、実現できないのかということを検討しているところです。

【菅野副館長】

基本計画の中では、いわゆるソフト面として活動内容、また、ハード面ではおおよその配置図面をお示しする予定です。北村会長からお話がありましたように、どうしても動かせない壁などがあって、手直しできないところもありますので、その辺りのことも踏まえながら、できる工夫をしていきたいと考えています。

【野尻委員】

実は、全国高P連の全国大会が、令和10年（2028年）8月に北海道で開催される予定で、全国から8,000人から10,000人くらいの学校関係者が来ることを見込まれています。もちろん、こういう時代ですから、SNSなどで調べて、観光がてら「どこへ行くのか。」といったことにもなると思いますので、もったいないなあとは思いました。

【北村会長】

年度が変わって、議論が進むかもしれませんが、停滞するかもしれませんが、先ほど申し上げたように、バッファーがあまりないので、進めなくてはいけないと思います。なるべく、皆さんの思いが良い形で実現するように、検討を進めていきたいと思っています。

【中井委員】

先ほどの続きになるのですが、建物に入ったときに、アート・レファレンスコーナーなども、どこに何があるかがパッと分かるようになれば良いと思います。

【北村会長】

アート・レファレンスコーナーのことは、前回の協議会でも出ていましたので、

レファレンスコーナー、ライブラリー、カフェなどへの動線をきちんと考えてほしいということは、検討会議で意見を出しています。

今のように、カフェがあって、ショップは2箇所に分かれていて、アート・レファレンスコーナーはまた別のちょっと隠れたところにあって、というような形ではなく、来館者が、観覧して、お土産を買って、調べ物をして、ゆったり過ごして、その雰囲気を持ったまま「今日は良い1日だったな。」と思えるような美術館にしたいと思いますね。思いが実現できるのかどうかは分かりませんが、ドリームをドリームに終わらせないで、夢を実現させていきたいという思いで、私も検討会議に出ていますので、今後も、御意見がございましたらお寄せください。

では、以上で本日の議事を全て終了いたします。委員の皆様、熱心な御協議、御協力に感謝いたします。

【議事終了】

事務局から、次回協議会の日程等の事務連絡を行い、すべての議事を終了。